

## 「山岳高層気象」番組存続を求める

四十年近くにわたって遭難事故防止に役立ってきた番組「山岳高層気象」（ラジオたんぱ）が、十四日の放送で打ち切りとなったことが十九日分かった——と新聞は報じた〔1月20日朝日夕刊〕。

1962年から「山岳気象解説」として、21時の日本上空の高層気象が翌日早朝に放送してきたこの番組は、1976年3月に番組の見直しで一度打ち切りを経験している。このときは山岳団体等から復活要求があり、また打ち切り直後に遭難事故が相次いだこともあって、国会でも取り上げられ、1978年6月から、夏山、冬山シーズンだけ復活した（翌年から春山シーズンも）が、単なる復活ではなく、極東域の700 hPa 等圧面天気図の概略が描ける内容に改められた（丸山，1978）。教育界でも、高校地学の教科書に高層天気図が掲載されるなど、高層天気図に対する関心が高まり、この番組は、同じころ『しんぶん赤旗』が700 hPa 天気図の掲載を開始したこととあわせて、実況天気図の簡便な入手先となってきた。1986年のチェルノブイリ原発事故では高層天気図が地球規模で広がる放射性物質の流れを描き出した（丸山，1986）。

今日、天気図をめぐる情勢はきびしい。単に長く続く不況の影響で放送番組にスポンサーがつかないという事情だけではない。国民教育の指針として平成14年度から実施されることになっている文部科学省中学校学習指導要領には、中学校理科から天気図の作成を削除し、日本の天気の特徴は高校に移行統合することが記されている（文部省，1999）。天気図（このばあいは地上天気図だが）の作成が削除されれば、天気図軽視につながることはまちがいない。日本の義務教育段階で日本の天気の科学的学習が行われないのでは、日本

付近の天気図の出番もないからである。

天気図は今や役割を終えたのであろうか。気象衛星画像は宇宙から雲の分布を映し出し、レーダー・アメダス合成図はいま降っている雨の分布を映し出す。これをアニメで動かして見れば天気図の代わりになるだろうか。人体に感じないほどのわずかな気圧の変化が天気を支配していることを発見したのは17世紀の科学者であった。当時は気圧も天気も自分のところ1地点しか見ることができなかつたのが、通信・情報技術の発展により天気図（気圧配置）と天気を全世界にわたって同時にみることに成功した今日、天気図を出してこそ、雲や雨や嵐の分布と変化を科学的に理解することができるようになったのである。

中止が予定されている「山岳気象通報」番組であるが、登山者だけでなくアウトドア・レジャーを楽しむ一般の方々に役立つものである。学校教育における理科教材としても役立つ。IT 機器の普及した環境で、いまさらラジオ天気図など不要という意見もあろうが、ラジオ受信機ひとつで天気図の概略が描ける特色は捨て難い。スポンサーが現われてぜひ存続させてほしい番組である。

（東京学芸大学 丸山健人）

### 参 考 文 献

- 丸山健人，1978：日本短波放送の高層気象通報開始に思う，天気，25，540。  
 丸山健人，1986：[文化]夏山出番です高層天気図，日本経済新聞，7月26日付。  
 文部省，1999：中学校学習指導要領（平成10年12月）解説—理科編一，文部省，162pp。